

# E EVENTOLOGY

イベント学会会報「イベントロジー」 Vol.1 No.1 1998

## CONTENTS

- イベントこそが繁栄のカギ  
木村尚三郎 — 1
- 7つの委員会の活動報告 — 4
- 98年度大会開催概要決まる — 6
- 江戸のイベント口事情 — 6
- イベント学会への提言 — 7
- イベント学会事務局日誌 — 8

## MY EVENTOLOGY

### イベント学会設立にあたって イベントこそが 繁栄のカギ

驚き・楽しさ・夢の創造

イベント学会会長 木村尚三郎

#### ■ 暗い世の中に明かりを 灯した幸之助の「初荷」

昭和6年の1月といえば、昭和4年から5年にかけての世界大不況を引きずっていたときのことである。天気も景気もすっかり冷えこみ、会社や町工場が倒産し、失業者が町にあふれ、役人の減俸とか娘の身売りといった、今日の不況よりもなお一層暗い話題ばかりの正月である。その1月4日午前6時、松下幸之助は景気づけに、工場からの「初荷」を敢行した。不景気で、久しく誰もそんな気分にはなれなかった時代であった。

雪の舞い散るなかで前日から夜を徹して準備された60余輛のトラックは、「初荷」の幟を高々とかけ、工場製品を満載して、得意先の商店めぐし、新春早朝の大阪市内をいっせいに疾駆した。その



# あらゆる活動にイベント性が 求められる時代がやってきた

明るさ、華やかさ、元気よさに、町中の人々が驚き、目を見張った。トラックの旗や幟に書かれた「ナショナル」「松下電器」の文字が、強く鮮やかに人びとの眼に焼きついたのであり、こうして松下電器産業の基礎は形づくられた。

「真の経営者は、不景気に際して、かえって進展の基礎を固めうるものである」と松下幸之助は述べる（神坂次郎『天馬の歌——松下幸之助』新潮文庫版、平成9年より）。

暗い世の中に明かりを灯し、人びとの心に驚きと感動、そして元気を与えた松下幸之助の「初荷」は、それこそまさに、今日の私たちがいう、一大「イベント」であった。

お正月、新年、新春といえ、誰もが爽やかさとか夢を覚え、「今年こそは何かいいことが」と期待し、初詣に祈る。その明るさ、楽しさ、夢を求める人びとの心に、松下幸之助はみごとに訴えかけ、それによって商売を伸ばし、事業を成功させることが出来たのであった。

## ■先行き不透明な時代に 人は「できごと」を求める

世の中が暗ければ暗いだけ、理性によって成功することは、国も企業も地域も

個人も難しい。そのぶん先行き不透明感は強くなり、人は感性を鋭くさせ、想像力の翼を大きく広げようとする。不安感が強くなり、自己防衛本能が目覚めるとき、嗅覚、触覚、味覚、聴覚、視覚などの五感が鋭敏になることは、海外での一人旅などで誰もが経験するところである。

そのような状況下では、喜怒哀楽の感情の起伏が活発になり、ちょっとしたことに驚きとか感動を覚え、大きな幸せとか、ときに悲しみ、怒りなどをも感じて、心の針は日々右に左に大きく揺れ動く。そこには、つねに美しい景観とかおいしい味に期待の胸をふくらませ、日々「驚きと楽しさと夢」を求める自分がある。ふだん空白のままの手帳は、ひとり旅のあいだちょっとした「できごと」の連続で一杯に書きこまれる。やたらとカメラのシャッターが切られ、ビデオカメラも廻り通しである。

そのような「できごと」こそが、「イベント」の本質であるといえるのではないか。先行き不透明感の強いときは、誰もが「ひとりぼっち」を覚えて心細く、そのぶん愛情とか友だちになり合うことに恋し、日々楽しく美しい生活であることを夢見、何か面白い「できごと」はないかと探し求めて動き、右往左往する。

だからこそ、人は先行き不透明のとき



イベント学会設立記念パーティーでスピーチする木村会長



に旅をする。失恋したり、事業に失敗したり、病いその他の大きな、名状しがたい不安、苦しみを得たとき、遍路の旅に出るように。マドリードに本部がある「世界観光機関」(WTO)の発表によれば、1997年における全世界の外国旅行者数は、6億1300万人であった。地球の総人口59億人ほどの1割以上が、すでに海外・国外旅行に毎年出ている。

この数字が西暦2000年には7億、2010年には10億、2020年には16億にふくれ上るだろうと、「世界観光機関」は推定する。不景気にもかかわらずではなく、全世界的に不景気だからこそである。

### ■「驚きと感動」の有無が 繁栄と衰退のカギとなる

小は散歩、大は海外旅行の形で人はいま、「何かいいことはないか」と、「驚きと楽しさと夢」を求めて動き廻る。何かいい情報が入るのではないかとつねに期待しながら、携帯電話を持ち歩き、インターネットや電子メールに目を走らせる。そして何か面白そうなことが起これば、「何だ、何だ」と「驚き、楽しさ、夢」を期待して人が集まる。万博であれ、見本市であれ、地域の祭りや催しであれ、新製品の発表会であれ、何であれである。そのような人の集まる場所に、21世紀の繁栄がある。地域であれ、都市であれ、

企業であれ、「何か面白そう」という魅力、愛とか美しさの驚きや感動を与えつづけることができなければ、人は集まらない。人が集まらなければ賑わいとか繁栄もない。技術文明が大きな意味で成熟し、全世界どこでも同じような物を同じような価格で売る時代が、100年ぶりにやってきたからである。

わが国では「イベント」という言葉に、「催し」「催事」という日本語が充てられているようである。より正しくは、「驚き、楽しさ、夢」のある「できごと」というべきであろう。たとえ催事であったとしても、型通りの入学式、卒業式や結婚式であったとすれば、イベントではありえない。何か面白そう、楽しそうなイベント性を求めて、現代人は動く。

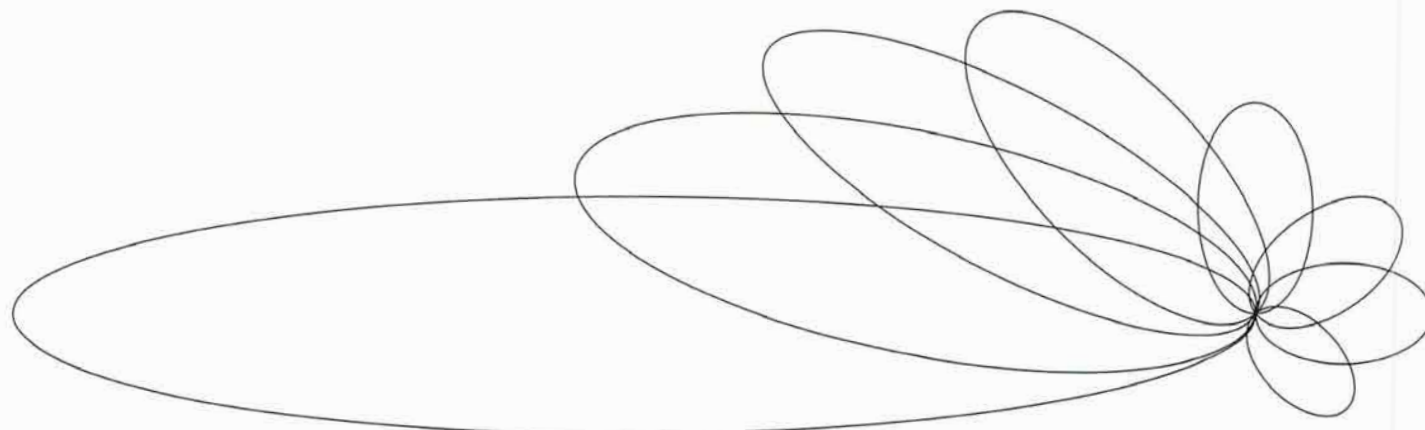
企業・団体活動、地域や町づくり、経済・文化・スポーツその他、ありとあらゆる活動に、そのイベント性が求められる時代がやってきた。イベント性の有無、イベントの良し悪しが活動の成否、繁栄と衰退のカギとなる時代がやってきた。

世界にさきがけ、「イベント学会」がわが国で設立されるにいたった意味は、以上の如くである。すぐれたイベントを創造し、企業にも地域にもイベント性を付与して、21世紀の繁栄と幸せを生み出す知恵、ノウハウを、ぜひ世界初の本学会から生み出していきたいと思う。



木村尚三郎

イベント学会会長。  
東京大学名誉教授。1930年生まれ。  
東京大学文学部西洋史学科卒業後、  
同大学教養学部教授を経て、90年  
より現職。専門分野はヨーロッパ史、  
現代文明論。横浜市文化振興財団名  
誉理事長、北九州市コンベンション・  
ビューロー理事長、鹿児島県立  
霧島国際音楽ホール館長。著書に  
『ヨーロッパとの対話』(第23回日  
本エッセイスト・クラブ賞受賞)  
『文明が漂う時』『折り返し点からの  
発想』などがある。



# 7つの委員会が連携しながら 知のダイナミズムを生み出す

## マネジメント委員会

委員長 井関利明



慶應義塾大学総合政策学部教授。1935年生まれ。慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程修了後、同大学文学部教授などを経て現職。専門分野は行動科学、消費者行動分析、組織戦略論など。今後の研究テーマは、21世紀における価値観、組織経営、マーケティングの革新。

## 組織全体を調整し、絶えず活性化していく

イベント学会には7つの実行委員会がある。学会の持つべき機能をそれぞれの委員会という縦割り組織にしたわけだが、組織が動き始めると新しい問題が起こるのが常である。マネジメント委員会は、そのような新たな問題に柔軟に対応しながら、各委員会の機能・動きを調整して、常に全体を活性化していく、リフレッシュしていく役割がある。そのためには、会員はじめ各委員長との密なコミュニケーションも必要になるだろう。

単なる運営委員会にはしたくない。組織というものは一度できると固定化し、硬直化に向かう。が、硬直化したとしたらイベント学会は意味を失うだ

ろう。したがって、硬直化しようとする組織を解体し、絶えず刺激を与え、柔軟な流動性のあるものにしておかなければいけない。そのためには、癒着しようとするものを引き離したり、対立しているものを調整するという役割も担う必要がある。

また、絶えず世界中の新しい情報を取り入れながら、ホットな話題を常に投げかけていくことも必要になるだろう。イベント学会の中にイベントを仕掛けることもあるかもしれない。めざすところは「浮気で腰軽な、落ち着かない組織」である。そもそもイベントというのはそういう状況を創り出すための仕掛けなのだから。

## 研究部会委員会

## 98年度大会実行委員会

委員長 望月照彦

## 総会・大会それ自体がイベントである



多摩大学経営情報学部教授、望月照彦研究所代表。1943年生まれ。日本大学理工学部大学院修了後、79年望月照彦都市建築研究所設立。90年望月照彦研究所に改称。専門分野は都市創造、産業振興、ウォーターフロントなど。行政、民間のプロジェクトを多く手掛ける。

### ■イベント学会総会・大会の目標と意義

第1回目を迎えるイベント学会総会・大会の役割は、いうまでもなく大切である。総会・大会それ自体がイベントであることから、いかなる総会・大会を開くかは会員のみならず、イベントに関心を持つ多くの人々の注目の的となるからである。

まず、学会という概念を打ち破らなければならない。アカデミズムによって独占された学会ではなく、開かれた知のダイナミズムを生み出さなければならない。何よりも閉塞された社会状況に風穴を開ける、社会と動的に関係する組織と仕組みを持つ必要がある。

有り体にいえば、役に立つ学会ということである。世の中には役に立たない学会が多すぎる。そして、そういうイベント学会の状況そのものがイベント的なものでなくてはならない。それ

が、イベント学会の目的である。

次に何ゆえにイベント学会は総会と大会を行うのか、その意義を述べたい。

1. イベント学会総会・大会は、役に立つ学会として毎年その開催場所を変える。具体的なフィールドで開かれた学会を目指すからである。

2. 毎年、学会の開催テーマを持つ。本年度は『イベントシティ創造』とし、世界で最初のイベントシティの成立可能性を研究・実践の課題とする。

3. 総会・大会をパートナーシップ・イベントと位置づけ、開催都市の自治体、公的組織（商工会議所・青年会議所など）や市民とのコラボレーションをめざす。

4. 役に立つ学会として、開催都市の地域活性化のための提案・クリニックを大会プログラムに組み込み、会員はもとより市民、学生の参加を可能にする

仕組みを持つ。

5. 学会と開催都市は、大会後にも継続する関係を持ち、学会は地域の支援体制を大切にす。また、大会開催時に次年度の開催都市を確定し、持続性を明確にしておく。

本年度は、「横浜市」での年次大会が決定され、横浜市当局とイベント学会事務局の間で熱心な開催に向けての協議が行われている。



## イベント大学委員会

委員長 長谷川文雄



東北芸術工科大学理事・副学長 大学院芸術工学研究科長。1948年生まれ。電気通信大学大学院修了後、清水建設、マサチューセッツ工科大学客員研究員などを経て現職。専門分野は都市情報学、システム工学。研究テーマは「未来予測」。

## イベント学の構築に向けての思考の場

イベント大学では、学会の中でも研究、教育などやアカデミックなところを扱うことになる。単なる知識の共有ではなく、今後のイベント学の構築に向けて思考を続けていきたい。当面の活動は講座「イベント大学」と、「イベント大学トップセミナー」を検討している。前者ではさらに、「イベント学原論」と「イベント学特論」に分けている。原論ではイベント学構築に向けた、

広範な知識と思考方法を学ぶ。単なる講義ではなく、課題提出や議論の時間をもちたい。また、特論では、「イベントシティ戦略研究」、「スポーツイベント研究」に講座を開設したい。

トップセミナーは自治体や企業のトップを対象にしたタイムリーな内容を盛り込んだセミナーで、地域経営や企業経営のためのイベント感覚を磨いてもらう。

## イベントフォーラム委員会

委員長 北本正孟



(株)カントリー代表取締役。プロデューサー。1933年生まれ。同志社大学法学部卒業。御堂筋パレード、食博覧会・大阪、89海と島の博覧会・ひろしま、第1回ジャパンエキスポ富山92、セビリア万国博覧会日本政府館などのプロデューサーを務める。

## 地元民と膝を交えて双方向交流を

経済のアップダウンは、個々の生活と社会全体を揺さぶり、きわめて大きな渦となっています。戸惑いと混乱の中で、自分の生活や信念に見合った“本質”を見極める目が求められています。こんな不透明で、閉塞感ばかりが目立つ時代だからこそ、出会いや交流が大切です。

イベントフォーラム委員会では、一般客をターゲットに、1フォーラム30名程で構成。3~4名の講師から成る、約20フォー

ラムを設定。会場は、開催地の喫茶店、料理屋、居酒屋、パブなどの飲食店を中心とし、双方向から忌憚のない話し合いを行い、膝を交え、ざっくばらんなかたちで地元の人々と交流します。

コンセプトは「T・E・D」(テクノロジー、エンターテインメント、デザイン)。有形無形の地域資源の発掘からグローバルな視点まで、さまざまな角度から語り合います。

## プロジェクト開発委員会

委員長 森下慶子



(株)ケービー代表取締役、長岡造形大学環境デザイン学科非常勤講師。慶應義塾大学文学部卒業。専門分野はイベント企画・プロデュース。国際交通博覧会、国際花と緑の博覧会、国際船と海の博覧会などのプロデューサーを務める。

## イベントの実験的試みを楽しみたい

プロジェクト委員会の面白さは、何も決まっていない点にあります。

学会、実務者、企業、自治体などのもつ課題の自主・受託研究、コンサルティングのプロモート……というのが、使命ということになっています。

つまりは、多くの人々が歓迎し、共有できるイベントを発明する実験的試みを楽し

めるのではないかと考えています。イベントを進化させる現場を求めている方々の積極的なご参加を期待しています。

何をやるのかって？

それはもう、そこら中に種があるので、どれから手をつけようかと悩んでいるところなのですが――。

ところで、あなたは何をしたいですか？

## 広報委員会

委員長 藤江俊彦



淑徳大学教授、経営アナリスト。1946年生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒業後、広報、マーケティング論・経営環境と組織文化論などをテーマに活躍。著書に「現代の広報」(96年日本広告学会賞受賞・日本図書館協会選定図書)「環境コミュニケーション論」他。

## 学会コミュニティに報いるような活動を

イベント学会は世界で初めてのものであり、その存在や活動を広く社会に知ってもらわなければならない。広報委員会は主にパブリシティ、会報(ニューズレター)の発刊、研究論文集の作成などを通して、その目的を達成していきたい。6月3日、第1回の会合を開き、各委員から広報委員会の在り方について意見が出された。例えば、学会の広報を会員や組織の拡大につなげること、若者の参加、イベント学をパブリシ

ティーすること、世界規模でのイベントの褒賞制度の検討、記者発表会の開催などが提案された。当面の課題として、学会会報の創刊号の企画を議論。名称は「イベントロジー」で意見が一致した。

広報とは「広く社会に報いる」ことである。広報委員会も学会コミュニティに報いるような活動をしていきたい。会員各位のご協力をよろしくお願いいたします。



# 「イベントシティの創造をめざして」

イベント学会'98年度大会開催概要決まる

イベント学会'98年度大会を、次の要領で開催します。詳しい参加要項は、第2号会報(10月発行予定)でお知らせします。

## ◆大会テーマ

「イベントシティの創造をめざして」

## ◆会場

「パシフィコ横浜会議センター」他  
(横浜市中区)

## ◆スケジュール

第1日 12月4日(金)

(1)『横浜市イベント政策』

13:30～17:00

- ・横浜市のコンベンション都市構想
- ・市内イベント施設見学バスツアー

(2)『イベントフォーラム』

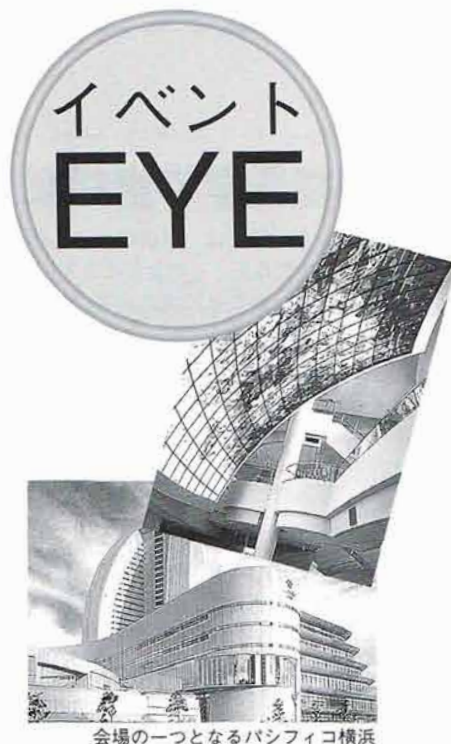
17:30～20:00

市内飲食店などで横浜市民と交流

第2日 12月5日(土)

(3)『イベント学会分科会』

10:00～12:00



会場の一つとなるパシフィコ横浜

(4)『イベント学会総会』

13:00～14:00

(5)『イベント学会大会』

14:00～17:45

- ①基調講演 木村尚三郎会長
- ②シンポジウム 懸賞論文入賞者  
「イベントシティ横浜を創造する」

(6)『懇親パーティ』

18:00～19:30

## ◆参加費

会員1万円 (2)『イベントフォーラム』別料金

## ◆懸賞論文募集

(1)テーマ

「イベントシティ横浜を創造する」

(2)趣旨

「21世紀をリードする世界的な魅力ある「イベントシティ」をいかに創造するか」を提案する。

(3)応募要項 一般公募

詳細は第2号会報に掲載

## COLUMN

江戸のイベント口事情(二)

# 江戸幕府のはじまり

30年近くも前に上梓された、司馬遼太郎とドナルド・キーンの対談『日本人と日本文化』。その冒頭に曰く、「平城(奈良)遷都(和銅3年、710年)の目的は、いまでいえば万国博みたいなもので…。と、これをうけてキーンも、日本最初の寺院である四天王寺(593年)は「迎賓館」だったと指摘する。

さすがに鋭い。いまさら「人類の歴史はイベントの歴史」などと、訳知り顔にものをいうのも恥ずかしくなるところだが、それはそれとして、人類初の大量消費社会を育んだ江戸時代が、とりもなおさず大量動員の「大イベント時代」だったという確信に変わりはない。

そこに何か、今日的なイベントロジーの視点から切り出せるものがあるかもしれない。「江戸イベント口事情」と語呂合わせして本稿を起こすゆえんである。

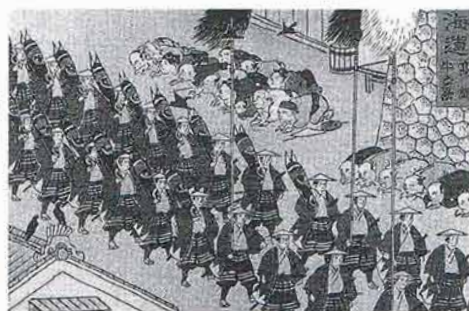
さて、江戸時代のはじまりは徳川家康の江戸打ち入り(天正18年、1590年)か、

慶長8年(1603年)の幕府開設ということになっている。

前者は8月1日。後に「八朔」の儀礼として公式年中行事の一つとなり、市民を巻きこむ一大イベントに成長していく。また後者は將軍宣下という古くからの朝廷の儀式が、四代家綱以降は勅使下向による江戸城でのイベントとなり、これまた八百八町の町人たちが競って参加した。

將軍家の権威昂揚に与かったこと無論である。

(株)インタープラン代表取締役  
日本大学芸術学部非常勤講師 園田榮治



パフォーマンス性に富んだ大名行列  
「東海道高縄牛小屋」文久3年5月の錦絵。河鍋晩斎画(及川茂氏蔵)





(株)長銀総合研究所企画部調査役。1956年生まれ。一橋大学社会学部卒業後、日本長期信用銀行入行。調査部を経て現職。研究テーマは文化産業を中心に観光、博覧会、地域おこしなど。主な論文・著書に「これからの日本経済とレジャー産業」、月刊「観光」にコラムを共同執筆中。

## 未来を創造する イベント学会への期待

秋岡栄子

クリントン大統領の訪中は、見事に演出されたイベントだった。

9年ぶりにアメリカ大統領が降り立った中国の地は、中華4000年の歴史の要である、かつての唐の都・西安であった。皇帝級とも賞された、その荘厳で華やかな中国側の歓迎ぶりは、マスコミを通じて全世界に伝えられ、「中華文明ここにあり」という、大国中国の伝統の力をまざまざと見せつけた。その一方で、クリントン大統領は、4000年の歴史の重みなどものともせず、「民主、自由、人権」という錦の御旗をかかげ、20世紀が育てた最大の現代文明である「アメリカ文明」をバックに、「わが国の歴史は、中国の一朝分」と軽くジョークで笑い飛ばした。

国家外交においても、イベント的なセンスが重要になってきているのである。湾岸戦争では、リアルタイムで世界中に空爆の画像が送られ、「戦争をいかに演出するか」ということが、世界の世論を左右し、国際政治に大きな影響を与えた。

日本には「謙譲の美德」、「秘するが花」という言葉があるが、時代は大きく変化している。イベントのセンスや技術、すなわち空間創造能力や自己情報発信技術の重要性が高まっていることは、国際舞台のみならず、国内の地域振興や個人の社会生活においても、何をかいわんやである。

「イベント学」には、定説となるような学説や理論体系は見だしにくいかもしれない。しかし時空を越えて、東西南北に縦横無尽に広がる可能性をもつ、時代とともに生きる学問であることは間違いない。イベント学会での議論は、現在を検証しつつ、未来を創造する試みになると期待している。



(株)アタマテ・インターナショナル代表、(株)チエノワ文化計画研究所所長。武蔵野美術大学造形学部卒業後、エンジンルーム取締役を経て現職。イベント、映像、雑誌、テレビ番組などの制作に携わる。研究テーマはアート、フォーラム、ダンス、文化催事企画制作など。

## イベント氏解体説

榎本了亮

日常的なにげない、さりげない時間と空間を、オヨヨと突然怪しくすることがイベントであるなら、これだけのイベント系人間の大集合が怪しくないわけがない。どうやらこれはそれだけで、20世紀最後の怪団事でありませぬ。しかし何故またいまさら「学会」なのでありませうか。

ここにきて快刀乱麻のイベント氏も、くたびれてドック入りしたとたん、ちょっとした油断に首ネッコをピン捕まえられてしまった。さてその行状の数々を白日のもとに曝し、さらには頭蓋骨カチ割り、五臓六腑をカッ裁いて、すっかりターヘル・アナトミア。この際学問資料として、ブタ箱ならぬ標本箱に、叩き込んでしまおうというのがもっぱらの魂胆らしい。

いわれてみればイベント氏、一時期と較べたら羽振りもあまり芳しくなくない。御用の時は働き過ぎの勤続疲労。稼ぎ過ぎの批判フンブン。あれではすぐに捕まる。イベント氏は一人で患部だった。だがお祭り仕掛けのオレンチも、散財の後の勤労を促し、沈みかけた世間に活気を与え、やっぱり世の中面白くなくちゃ、また次の祭りまではガンバンベエの思想。そこそこあそこをパーッとさせちゃうのが、イベント氏のいいところだった。

だが、イベント氏は捕まった。そしてこのイベント学会で解体される。そう思っていた。しかし事態はどうもそうではないらしい。正義の闘いにズタズタボロボロになった鉄腕アトムがやっとの思いで辿り着く、お茶の水博士の研究所。つまりイベント学会は、ズタボロのイベント氏にとってのお茶研なのである。ここでしっかりと分解整備して、次世紀型最強のターミネーター・イベント氏を創製しようというのが、どうやらの真意。イベント学会は、そのための知恵を集めた再生装置と考えるべきだろう。



プロデュース作品「ダンスクロッキー」  
(日比野克彦/梅田スカイビル)



## イベント学会事務局日誌 (1998年2月~7月)

### 3月18日(水) イベント学会設立総会

半蔵門・東条インベリアルホールには、発起人147名のうち、九州、関西、北陸など全国各地から80名、お祝いの来賓を含め150名ものご参加をいただいた。

発起人として、大学、研究所関係が35%、デザイン、企画関係が25%、他にも2名の県知事や公立・民間イベント施設、広告業関係など多彩。

総会では、下表の理事20名と監事を選任、その中から会長には木村尚三郎氏、副会長に井関利明氏を選任。

代表発起人のひとりである堺屋太一氏は、記念パーティで「150年の歴史をもつ万博は、EXPOLOGY (博覧会学) という知識・ノウハウの体系を作りだした。日本発のEVENTOLOGY (イベント学) が世界をリードすることを期待する」と挨拶した。

### 4月9日(木) 第1回理事会

イベント学会の今後の運営方針について意見交換を行った。学会運営について担当する委員会を設置し、原則として理事が委員長につくこととした (委員会および委員長は本誌4~5

ページ参照)。また事務局 (事務局長川本直彦理事) の設置を決定した。

### 5月15日(金) 第2回理事会

新入会申し込み、個人会員33名、準会員2名、法人会員3団体を承認。98年度の大会基本構想および会報第1号構想を承認。

### 6月3日(水) 第1回広報委員会

会報「EVENTOLOGY (イベントロジー)」第1号編集会議。

### 6月9日(火) 98年度大会実行委員会

横浜市企画局に98年度イベント学会大会基本構想案を説明し意見交換を行なった。

### 7月8日(水) 第3回理事会

新入会申し込み、個人会員24名 (合計199名)、準会員0名 (合計2名)、自治体会員1団体 (合計1団体)、法人会員3社 (合計16社) を承認。98年度大会基本計画を承認。12月4~5日開催 (概要本誌6ページ参照)。学会のシンボルマークを採択。会報第1号構成案を承認。

## イベント学会役員名簿

### 個人会員役員

(五十音順)

会長	木村尚三郎	東京大学名誉教授
副会長	井関利明	慶應義塾大学
理事	泉 眞也	金沢美術工芸大学
理事	川本直彦	イベント学会事務局
理事	北本正孟	(株) カントリー
理事	堺屋太一	作家
理事	園田榮治	(株) インタープラン

理事	長谷川文雄	東北芸術工科大学
理事	平野繁臣	(株) 現代芸術研究所
理事	福川伸次	(株) 電通総研
理事	望月照彦	多摩大学
理事	森下慶子	(株) ケービー

### 法人会員役員

理事	石川浩生	(社) 日本イベント産業振興協会
理事	北島義俊	大日本印刷(株)

理事	東海林隆	(株) 博報堂
理事	鈴木和夫	凸版印刷(株)
理事	谷喜久郎	(株) 新東通信
理事	成田 豊	(株) 電通
理事	能村憲司	ティーエスピー太陽(株)
理事	乃村義博	(株) 乃村工藝社
監事	酒寄 正	(株) 協同エージェンシー

## イベント学会入会のご案内

本学会は、事業として、①イベントに関する理論的研究・実証的調査研究 ②新しいイベント技法の研究・開発 ③イベント関連学術情報収集・研究発表・発刊 ④イベント研究団体・研究者の交流・協力を行ないます。入会を希望される方は資料を下記の事務局にご請求下さい。なお、会費は次のとおりです。

	(1) 入会金 (円)	(2) 年会費 (円)
個人会員	5,000	10,000
準会員		2,000
自治体会員	20,000	50,000
法人会員(1口)	100,000	100,000

## 「EVENTOLOGY」創刊の言葉

会報第1号をお届けいたします。

誌名は「EVENTOLOGY」。「イベント学会自体がイベントであり、会報を出すことそのことがイベントである」という考え方で、イベント学をダイナミックに提唱していきたいと考えています。

この会報は、学会事務局と会員、そして会員相互のコミュニケーションを図るための場です。会員の皆様からのイベント学、あるいはイベント学会や会報に対するご意見やご提案をお寄せいただければ幸いです。また、イベント関連で新たに出版された著書、発表論文などをご惠贈いただければ、会報で随時ご紹介していきます。

次号は10月発行予定です。お楽しみに。

## シンボルマーク制作の言葉

たえず新しい事、面白いモノに向かおうとする人間の強い欲望。その精神性、肉體性をひと言で表わすと、「イベント」というカタカナ表現になるのか。

EVENTOLOGY。

未来につながる言葉として、デザインとイベントがあると思う。デザインは精神性が強い言葉だ。イベントは肉體性が強い。この二つの言葉を合体させると新しい動きが出てくる。Eの字の中央線にマッチで点火した瞬間を表現した。イベント学会が爆発を起こす。

アートディレクター 浅葉克己

浅葉克己デザイン室主宰。東京ADC委員、JAGDA理事、東京TDC会長。1940年生まれ。日清食品、西武百貨店、サントリーなどの広告を多数手掛け、日本の広告界をリードする。



JAPAN INSTITUTE OF EVENTOLOGY  
イベント学会